

福島子ども健康プロジェクトだより

Vol.4

福島のお母さんと「もう一つのつながり・居場所」を!!

みなさん、こんにちは。東日本大震災・原発事故から間もなく12年。幼かったお子さんたちも来年は中学3年生ですね。その成長を喜ぶとともに、思春期真っただ中のお子さんたちの子育てに悪戦苦闘されている毎日ではないかと思えます。

福島子ども健康プロジェクトでは、「語り合いの場ふくしま」の一環として、今年の6月から9月に全4回の思春期の子育てに関する連続セミナーを「対面」と「オンライン」で開催しました。福島と東京、大阪、愛知、ドイツのミュンヘンなどを結び、それぞれのママさんたちが、子育ての不安や悩みを共有するとともに、日常からちょっと離れ、新しい学びがあったり、発見があったり、それぞれ、リフレッシュできる時間を過ごされたのではないかと思います。私たちは、これからも、離れた地域のママさんたちを結ぶ「もう一つのつながり・居場所」を、福島のお母さんといっしょに作っていければと考えています。もしよかったら、どうぞよろしく願いいたします。

2022年10月21日

福島子ども健康プロジェクト 成元哲、牛島佳代

2021.4.24

「福島の人にとって、マスクを当て、屋内にこもって暮らすのは、原発事故以来2度目であることも忘れてほしくありません」
新型コロナウイルス禍の中、作家の柳美里さんが、2011年以降、福島第1原発事故の影響でロックダウン（都市封鎖）に近い生活を強いられた人々を思いやっている。柳さんは12年から福島県南相馬市の臨時災害放送局ラジオで、地元の人たちの話を聞く番組を始めた。15年には同市に移住。本屋を営み、地元の人たちと触れ合ってきた。
放射能への不安を身近に感じた人たちは、今のコロナ禍をどう思っているのか。中京大の成元哲教授らが13年から毎年続ける親子対象のアンケートに、今年678人（4月20日現在）の保護者が答えた。
それによると86%の人がコロナ禍と事故後の生活を「重なる」「ある程度重なる」と回答。「気軽に外出することができなかった」「外出時

射程 フクシマとコロナ

のマスク着用」「ニュースが気になる」「子どもや家族の体調が気になった」と類似点を挙げた。
福島市の母親（48）は自由記述に「放射能もコロナも、人々を分断させる」と書いた。現在は避難先の岡山県で暮らす男性（44）は「友人、職場、親族と危険度合いに対する考え方の違いと、それによる違和感、感情の対立」があったという。
「フクシマ」では、人によって放射能への不安に温度差があったり、避難に対する補償の線引きによって、人々の信頼関係や連帯が損なわれたりした。そのことで友人、家族、地域、県境などさまじまなレベルで分断が生じた。
コロナはどうか。世界各地で報道され、身近にも見聞きする差別や摩擦を見ると、やはり分断が生じているように思える。ウィルスは人の身体だけでなく、人間関係も侵食している。そのことを目を向け、フクシマの教訓を生かしたい。（農孝生）

活動記録(2020.12～)

(下線のあるものは、福島子ども健康プロジェクトのホームページからダウンロードしてご覧いただけます)

- 2020.12 「福島子ども健康プロジェクトだより Vol.3」を発行。
- 2020.12 調査参加者の子どもたちにクリスマスカードを送付。
- 2020.12 『中京大学現代社会学部紀要』に「持続的なトラウマ 原発不安の変化と特質に関する研究」を掲載。
- 2020.12 東京新聞「ふくしまの10年 母と娘 自主避難という選択⑦」に調査結果が紹介される。
- 2020.12 『こどけん通信』vol.18(2020年12月冬号)に「福島の記憶を未来へ」を掲載。
- 2021.1 第9回アンケート調査を実施。
- 2021.1 ワークショップ「語り合いの場ふくしま」をオンライン(ZOOM)で開催。
- 2021.2 中日新聞・東京新聞に「原発事故後の不安 コロナ禍と「重なる」」として第9回調査結果が紹介される。
- 2021.2 ワークショップ「語り合いの場ふくしま」をオンライン(ZOOM)で開催。
- 2021.2 手記プロジェクト「拝啓 10年後のわたしたちへ」の申込方法を発送。
- 2021.4 熊本日日新聞に「フクシマとコロナ」として第9回調査結果が紹介される。
- 2021.4 手記プロジェクトに申込された調査参加者に「ふり返り手帳」を発送。
- 2021.5 第9回調査報告書を作成し、調査参加者、福島県庁、9市町村役場、報道機関に送付。
- 2021.5 福島民友新聞に「コロナ禍の生活 原発事故後と重なる8割」として第9回調査結果が紹介される。
- 2021.7 聖教新聞に「集合的トラウマとしての原発事故 福島子ども健康プロジェクトから見てきたもの」を掲載。
- 2021.8 梨の木ピースアカデミーにて「集合的トラウマとしての原発事故、分断修復の試み」と題し報告。
- 2021.12 調査参加者の子どもたちにクリスマスカードを送付。
- 2022.1 トヨタ財団広報誌 JOINT〔ジョイント〕No.38 に「地域における分断・人間関係を修復する手がかりに」を掲載。
- 2022.6 連続セミナー「みんな、子育てどうしてる？ 子育てにかかわるコミュニケーションを考える」第1回を、郡山市商工会議所とオンライン(ZOOM)で開催。
- 2022.7 連続子育てセミナー第2回をコラッセ福島とオンライン(ZOOM)で開催。
- 2022.7 『中京大学現代社会学部紀要』に「トラウマを抱えたコミュニティ 集合的トラウマの社会学」を掲載。
- 2022.8 連続子育てセミナー第3回をオンラインで開催。
- 2022.9 連続子育てセミナー第4回をオンラインで開催。



子育てにかかわるコミュニケーションを考える」開催報告

子どもたちは中学生となり、思春期にさしかかっています。成長著しい子どもとの向き合い方について、心理学や社会学から新たな視点を学び、身近な人とより快適に過ごすヒントをえる場として、計4回の連続セミナーを開催しました。講師は第1回、3回は水木理恵さん(福島県立医科大学放射線医学県民健康管理センター助手)、第2回、4回は出口真紀子さん(上智大学外国語学部教授)、企画・運営をリードしてくださったのは栗本知子さん(あおぞら財団特別研究員)でした。講演内容から子育てに役立つポイントをご紹介します(詳細は当プロジェクトHPで公開中)。

第1回

「あなたとわたしの境界線 自分を守り、人を傷つけない
コミュニケーション」

ポイント 自分と他者の間には境界線があります。その内側の気持ち、考え方、行動は自分自身が決める大切なものです。子どもが小さい頃は親が境界線を越えて助けますが、発達年齢にあわせて、親は子を尊重し、独立性と依存性のバランスを調整し続けることが大切です。



第2回

「日米子育て事情 ご近所とのつきあい方、どこが一緒でどう違う？」

ポイント 日本は他者とのつながり、関わりを大切にする協調型自己観でしたが、徐々に西洋的な独立型自己観へ変化しています。内集団(世間)が息苦しいときは、付き合いは浅くし、SNSなども活用して、自分らしくいられる友人と付き合うなど、柔軟にいろんな自己観を使いこなしましょう。

第3回

「こころもからだも大変身 思春期ってなんだろう？」

ポイント 思春期には、二次性徴など身体も心も大きく変化します。子どもたちが健全に発達し、自分の情緒を適切に調整する方法を学ぶためには、応答性の高い大人との継続的関わりが必要です。思ったより幼い面もある時期ですが、ポジティブな側面に関心に向け、子の親への信頼を育みましょう。なにより、子育てするご自身のセルフケアを大切に！

第4回

「ちょっともやっとする、嫌な言動 マイクロアグレッションってなに？」

ポイント 相手に悪意がなくとも、もやっとする、尊厳を傷つけるような言葉や行動。その背景に、マジョリティとマイノリティの力関係があることがあります。なんだかもやっとするとき、「そうかな?」「自分はそうは思わない」など、意思表示をしてみることで、風通しのいい関係性ができるかもしれません。



セミナー参加者の感想

第1回感想

親子関係における境界線、自分は子ども達を尊重できているのか再確認する良い機会になりました。資料を読み返し、時には振り返って確認することを忘れずに過ごしたいと思います。娘が友人との関係に悩んでいるので、今回のお話を元に彼女の気持ちに寄り沿ったアドバイスが出来るのではないかと思います。また、兄妹間のトラブルにも役立てられるのではないかと考えています。(郡山市Oさん)

第2回感想

セミナーに参加すること自体があまりないので、楽しかったです。勉強になりました。自分が、子育てで大切にしてきたことが、実は、独立型に近い接し方をしてきたんだと知り驚きました。自分が子どもの時に「女だから…」と強制されたことに対する反発からだったのですが、子育てを認めてもらえたようで、うれしいです。(福島市 Kさん)

第3回感想

自分のこどもが思春期なので、理論的な説明も息子がたどってきた成長過程を思い出しながら、うんうん、そういうことだったのね！と感じながら楽しく聞くことができました。特に印象に残ったのは、発達段階はピラミッド型でつまずいたときは2つくらい下に戻って考えること、思春期のこどもは大人として接するけれどたまに赤ちゃんになることです(^)。今のところ中2の息子とひどいバトルはしていませんが、今後対応に困ったときは今日の講座を思い出したいと思います。(郡山市Yさん)

第4回感想

マイクロアグレッションという言葉に最初はピンときませんでしたが、自分の行動パターンを振り返る良い機会になりました。相手が話した内容をあれこれ忖度しているうち、抗議したり反論するタイミングを失い、結局心にモヤモヤだけが残ってしまう…。マイクロアグレッションの概念が自分の中に定着していたら、また違った立ち回り方ができていたのかもしれない。(郡山市Yさん)



セミナー第4回 参加者交流の様子(2022年9月18日)

今後の予定

「つながる場ふわっと」企画中!

「福島子ども健康プロジェクト」はこれまで、毎年1月のアンケート調査の後、5月には調査結果(報告書)を冊子にまとめて送付し、3月と8月を中心に現地でお母さんたちから直接お話を伺う機会を作ってきました。9月には、調査参加者の声(調査票の自由記述)をまとめた論文を、そして、12月にはお子さん宛てにクリスマスカード、誕生日カードをお送りしてきました。2019年と2020年には希望者の方に、ご回答いただいた内容を個別にまとめた「親子をつなぐサポートブック」と「ふり返り手帳」を送付しました。その後、直接、調査参加者の方とかかわる場として「語り合いの場ふくしま」を開催してきました。

みなさんにご協力いただいた膨大な調査結果を記録、分析し、世に問う作業は継続して取り組めますが、今後も、調査参加者のみなさまと各地のママさんたちをつなぐ「つながる場ふわっと」を企画中です。今後も、ゆるく、ふわっと、定期的につながり、顔を合わせておしゃべりする場を開催できたらと考えています。詳細は確定次第、「福島子ども健康プロジェクト」のホームページやFacebook等でご案内いたします。ぜひご参加ください!

皆様からの
お便りやご意見を
お待ちしております。
右記まで
お寄せください。

福島
子ども健康
プロジェクト

〒470-0393 愛知県豊田市貝津町床立 101

中京大学 成元哲研究室

TEL & FAX: 0565-46-6516 (直通)

E-MAIL: sungwonc@sass.chukyo-u.ac.jp

HP: <https://fukushima-child-health.jimdo.com/>

